徳川女系図

《慶喜 大奥落日の巻》

21

岩崎栄

徳間文庫

徳川女系図(とくがわおんなけいず)21

《慶喜　大奥落日の巻》

© 1983 Jirô Iwasaki Printed in Japan

429-21

著者　岩崎栄(いわさきさかえ)

発行者　荒井修(あらいおさむ)

発行所　株式会社徳間書店
東京都港区新橋四―一〇 〒一〇五
電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替　東京四―四四三九二番

印刷　凸版印刷株式会社

製本

1983年8月15日　初刷

〈編集担当　萩原　実〉

ISBN4-19-597511-5（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

徳間文庫

徳川女系図 21

《慶喜 大奥落日の巻》

岩崎 栄

徳間書店

目次

その一　お志賀　5
その二　天璋院　143
その三　和宮　196
その四　実成院　263

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その一 お志賀

剣と美女

1

「へえ、まいどおありがとうございい」

十二か三か、小僧だ。口癖になっているのだ。

「へ、まいどおありがとうございい」

浅草蔵前で、角屋敷の大きな構えで、公儀御用達。札差渡世でもある通称、丸清。藤村屋清兵衛の店土間だ。

「武、武士を愚弄うか」

このごろ、急に、江戸の巷をノシだしたいわゆる尊王浪士である。三人。鷹の眼、鷹の肩、黒紋

付に高足駄。月代を細く髪の毛は総括りにしたのを後へ刎ねたかたちにしている。どれもみな同じ型の三十歳前後が三人。その一人だ。店の奥で帳場に坐っている一番番頭の前まで、土足で踏み上がった。むろん抜刀をキラリと突き出して、

「毎度ありがとうとは、何たる嘲弄じゃ。許さぬ」

すでに、相当ゆすって帰りかけたところを、毎度ありがとう……などと小僧までが馬鹿にしやがったと憤る浪人なのだ。同伴の二人も、これは店土間で片足を上がり框に踏みかけている。小僧の口ぐせに因縁をつけて、もう一度ゆする肚なのだ。

「小僧をこれへ出せ」

刃の平でピタピタと平伏している番頭の頬をたたいた。まっ青な番頭が、

「どうぞ、ごかんべんを」

「ならぬ。主人を、も一度、これへ呼べッ」

「へえ、まことに、どうもはや、なにをお気に障るようなことを致しましたか存じませぬが、なにとぞ」

「ならぬ。もう一度主人に詫びのしるしをさせい」

そこの角柱に寄りかかって、しきりに刀の先をヒラヒラさせている。

「どうぞ、なにぶんとも」

「ならぬ。よし！　それではきさまから順々に店のものを叩っ斬ってくれるわ」

主人の清兵衛が現われて、柱の根元に這い伏さった。

「さきほどは……まことに、おありがとうさまに存じましたが、なにかまだ」

主人としては、金一封で生命をお許しくださってありがとうございました。それなのにまた店のものが何かお気に召さぬことをいたしましたでしょうか。と、そうした気持の挨拶なのを、わざと歪めて受け取った水戸訛の浪士だ。

「こやつめ！　主人までが尊攘の志士を嘲弄致す以上、もはや勘弁出来ぬ。さあ出せっ」

「へ、な、なにを差し出せばよろしいので」

「勿論、いのちだ」

主人も番頭も蒼白くなった。店のおもては通行止めの群衆である。

「なにとぞ、そればかりは」

主人と口を揃えて番頭も、どうか御勘弁をと、畳へ額をすりつけた。

「いのちをゆるしてくれというなら、いのちに代わるもんを出したらよかんべ」

店土間から一人のやつが、怒鳴り上げた。この両人も刀の柄に手をかけている。

幕府は米・英・露・仏――外国との通商交易を条約している。だからそこには通商貿易の実が挙がっており、この藤村屋あたりも、生糸その他の輸出・輸入で大きな利潤を得ている筈だ。水戸浪人はそこのところを突っ込んで、朝廷を軽んじ、夷狄に媚び追従する幕府を攻め、大老井伊掃部頭を討ち殺し、同時に夷狄と交歓し合って利得を積む商人をば売国奴として征伐する。これは尊攘の大本山水戸老公（斉昭）の御意志そのものだ、というのだ。

こうした脅迫論調でもって、先刻ここの藤村屋清兵衛から攘夷の軍資金と偽称し、小判三十両を欺き取ったのであるが、更にまたここで、行きがけの駄賃をせしめようという魂胆らしく、小僧の「まいどおありがとうございい」といった口ぐせに因縁をつけているのだ。素早い小僧は、いつど

こへどうしたのか影もかたちもない。
「では、あと、どのくらい、およそ」
差し上げましたものでしょうかと、主人はもの悲しそうに相手の相貌を見上げた。
「ウム、出すなら許してつかわす。わずか千両くらいでよかろう」
番頭が「げえッ」と肝を吐き出すように驚いた。驚きもしようし、肝っ玉を吐き出しもしようほどの大金である。その当時、幕府の金蔵（日本政府の公庫だが）のそこにでも、いつも千両程度の金はころがっていたようなわけのものではない。それほどの大金はいかに儲けた商法でも吐き出すことはかなうまい。
「そ、そんな無法」
「なに、無法とは――わしどもに向かって申す悪態であるかッ」
「いえ、決して、あくたいなぞ」
「黙れッ」
というやつに、土間から大声に怒鳴ったものがある。
「叩っ斬れ」
「よし！」
ほんとに斬る料簡ではなかったのかも知れぬが、ともかく体をひらいて上段に大刀を振り構えたとき、
「ちょっと待ったり！」
すらりとした若いのが、どこからか、ぬうっと現われて、その水戸浪士に立ち向かった。

長い朱鞘の落し差しはしていなかったが、黒羽二重の着流し、白い献上博多。五分月代の浪人頭で、例の金子重四郎。いつみても胸のすくような男っぷりだ。

「なんだキサマ。いずれから来おったぞ」

浪人どもは、ほんとにどこから出て来たのかと驚いたらしい。

この藤村屋は角屋敷だが、その次の右隣りはこれまた妙なところにあるけれど、界隈の旦那衆が飲宴に重宝している高級料亭の島屋だった。むろん通りからずっと奥深く、玉川砂利を敷きつめ、両側に竹を植えた引込み玄関になっている。

「へい、まいどありがと」と例の口ぐせで、田舎武士に怒鳴りつけられ、鉄砲だまみたいにどこかへふっ飛んでしまった、おそろしく敏捷な小僧が、実はこの隣接している料亭島屋へ、ぜいぜいと肩で息を刻みながら飛び込んだ。

ちょうど、手のすいていた内芸者でイキな年増のお蔦と、女将のお島の、まるで姉妹ぶんみたいに肌の合う同士のいい年増二人と長火鉢を中に、お茶代りの冷を湯呑で傾けようとしかけていたのが、この金子重四郎だった。例の朱鞘も帯びずに横路地からすぐに藤村屋の中庭まで、小僧に導かれたのだ。

「どこからでてきやがった」

水戸の豪傑はよほどこの妙な青年の出現が不審だったらしい。

「てめえはどこからまいった」

重四郎が逆に聞き返した。

「こやつめ、痩せ浪人のくせに、武士に対してなんたる口をきくか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「なにをいいやがる。田舎のべえべえやろうめ。水戸ってえところはユスリヤローの本場らしいね。攘夷の軍資金ドロボーといえばきまって水戸じゃねえか。水戸のナリ……ナリなんとかっていう耄碌爺は泥棒の親玉なのか」

土間が「斬れッ」と叫ぶ。その男も角柱を背に、いよいよ、ほんとに斬るつもりらしく構えを改めた。

その構えを重四郎は、北辰一刀流らしいと見て、

「なるほど水戸だね。しかも相当な腕だ。かなり罪つくりな人斬りをやったらしいね」

世間ばなしの調子だ。

「抜けえッ。青二才浪人め」

水戸さんは烈火の如し。

「抜けったって、おいら抜く刀を持っていねえんだよ」

「刀が無えのか」

「ごらんのとおりにて候」

「こやつ」

土間の仲間がまた、早く斬れよ、と声援する。と、この重四郎までが、

「ほんとだ。早く斬ってみせろよ」

と他人ごとみたいに言った。

「おのれッ」

水戸はいよいよ斬る気になったらしい。大上段の切っ先までピリピリと神経が通じたような動き

を見せた。このとき、重四郎のすぐうしろで紫陽花のような色彩がちらりとして、美しい声が呼びかけた。

「ちょいと！　重さま。はいお腰のものよ」

隣家にいた芸者のお蔦が、重四郎の朱鞘を両の袂にのせて傍らまで来た。眼中に水戸無し、といったような涼しい顔だ。

「ウム、ありがと。こんなやつらの三びきや五ひきに、刀なんざ大袈裟だが――せっかく惚れた女の好意だから」

「よけいなことといってないで、さ、早くウ」

「よし」

と応えた瞬間、同時の抜き討ちだった。朱鞘から稲妻が走った――と見えたとき、柱を背に構えた大上段の北辰一刀流先生が、その柱もろとも、すぱっと、小手擦りの胴切りだった。もちろん、柱もまっ二つだ。

重四郎は土間にいるユスリ仲間の二人にも挨拶した。

「いかが。ついでに斬らしてくれたらヨカンベ」

二人は土間を外に、山のような人だかりをかきわけながら逃げ失せた。

前髪も鬢もフッサリと膨らました根の低い潰し島田のこのお蔦はこれで、清兵衛の姪だ。江戸でも富豪の中に数えられる堅気な大店の奥へ勝手に出入りするわけは、清兵衛の亡くなった兄が、深川で深く馴染だ女に産ませた娘だったからだ。

「なんだって、こんな田舎っぺえの浅黄裏ヤローにゆすられるような弱いお尻持ってるのよ、叔父

さんたら」
お蔦が清兵衛になじるようないい方で訊ねた。
「尻なんざありゃしねえ。御公儀苛めの水戸さまの家来にゃ、こんなのが多いのだ」
清兵衛は重四郎を別室に案内させ、改まった仁義をつくし、お茶でも……と思って手をたたいたが、この家のものは、主婦も女中どもも店のものも、満足に口がきけて足腰の立つものは一人もいなかった。
「はい、重四郎さま、お茶代り」
お蔦が勝手の方から茶碗酒を塗り盆にのっけて来たが、
「ねえ叔父さん！　お金はいくらぐらいゆすられたのよ」
「ウン、三十両だ」
「いま重四郎さまに斬られたやつが、あの連中の棟梁なんでしょうね」
「ウン、あいつが大将株らしかったね」
「じゃア三十両は、あのやつのふところに」
「おう、そうだ」
「あたし取ってくる」
「これ！　バカめ」
と叔父清兵衛が叱りとめる間もなかった。血の中に死んでいるゆすり浪人を遠巻きに、まだ茫然としてなすところを知らず――といったようすの店員たちには目もくれず、お蔦は雪のような素足の脛が見えるまで、裾を高く捲り上げて帯紐に挟み、血の池を踏み渡るもののように、胴切りされ

ている浪人の脇に行ってしゃがむと、そのやつの懐中に、きれいな片手を深く差し入れた。
白紙に包んで、水引をかけた金一封だ。
「はい、叔父さん。三十両のお金、納まっときなさいよ」
叔父さんも呆れ返って、とんでもない真似をするお蔦を、まじまじとした目つきでただ見上げている。
主婦も女中たちも、みな奥の部屋で眼ばかりキョトキョトさせている。この連中もまだ腰が抜けたままなのだ。
「あきれけえった蓮ッ葉だねえ、いい年増のくせに」
重四郎が傍らへ寄って来た。
「ねえ重さま！　せっかくですから、このお金二人で山わけにしましょうか」
八重歯をちらりと見せた色っぽい受け唇がニコッと笑っている。
「金よりも先ず、その足でそこいら歩き廻っちゃいけねえぜ」
重四郎は落ち着いている。
「あんただって、このやつを斬ったんだもの返り血浴びてるんでしょ」
「返えり血を浴びるほどの未熟な腕じゃねえよ。人のこたアいいから、どこかに風呂場があるだろう。そこまで膝頭で這ってけよ」
「あんた負ぶってってくれない」
「まだそんなことしなきゃなんねえほどのお情けはいただいちゃいねえ筈だ」
「いただかしたげる、今晩」

「まアいいから風呂の流し場まで這って行きなさい」
「薄情もの。おぼえてらっしゃいよ」
お蔦は裾を高くからげた腰をもったてるような姿態で、鏡のような廊下を這いかけた。
「いい女の四つん這いってもなア、てもさても……」
「こらあッ」
お蔦がいきなり、重四郎の頸に飛びついた。

2

料亭島屋の奥の離れで、重四郎を主客に、藤村屋清兵衛が一席を設けていた。もちろん、女将のお島と芸者お蔦が座を取り持っている。きょうの脅迫浪人を成敗してくれた重四郎への感謝である。
先ず一献を交わし合った。お島もお蔦も乾杯した。
「ときに……甚だ失礼千万だと、お叱りをうけますのは覚悟の前でございます」
藤村屋清兵衛が妙に改まって厳格らしい調子に坐り直した。
「なんだ。なにをそんなに改まるのだね」
あっけにとられている重四郎をそのままにして清兵衛が、女将のお島に顎を振った。
「はい、かしこまりました」
こころえたお島が、床の上の白木の三方を取り上げ、捧げるようにして来て、重四郎の前に置いた。

「なんだい、それ」
奉書の包みに熨斗と水引だ。
「腹を切れっていうのかと思ったぜ」
清兵衛はまた、わざわざ膝をずりすさった。
「改めまして、今日の御礼。まことに寸志でございますが、お叱りなく、どうかお納めをお願い申し上げます」
「そいつア。この御招待の上にまだ金一封をくれるというのか」
「へへッ。失礼の段は千万……」
「ウン、いや、ありがたく頂いておこうよ」
お蔦が手をたたいた。
「偉いッ」
「控えろッ」
「はッ」
お島が吹き出した。重四郎は旗本金子佐渡の二男だ。あたりまえだと冷飯食いの身分なのだが、嫂の姉に姉小路――現在ではその役名は遠慮して、もとの橋本伊豫子という、大奥の大名格だった金持がいる。しかもひどく可愛がられ、充分以上の遊興資金を貰っている。別に遊興費としてくれるわけでもあるまいが、ただなんとなく「はい、お小遣」といっては与えるのだ。
だから重四郎は、遊びのもとでくらいなことに困りはせぬ。それなのに、あるじ清兵衛は辞退されるものときめてかかったし、女将やお蔦も受け取らないだろうと思っていた重四郎が、いささ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com